

Keiba Global Front Line



競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します

合田 直弘

今月のこのコラムは、来春の3歳クラシック制覇が期待される注目の2歳馬を紹介したい。2026年5月2日にニューマーケットで行われるG1英2000ギニー(芝8F)へ向けた前売りマーケットで、ブックメーカー各社が揃って1番人気オッズ7〜9倍に推す、アルバートアインシュタイン(牡2、父ウートンバセット)がその馬である。

アイルランドのクールモアによる自家生産馬で、クールモアの主戦調教師であるエイダン・オブライエンが管理する同馬。母イェットは、カラ競馬場を舞台とした2歳G2エアリースタッドS(芝6F)の2着馬で、アルバートアインシュタインはその初仔となる。祖母バタフライズの半兄に、7Fから10Fの距離カテゴリーで6つのG1を制し、「アイアンホース」の異名をとったジャイアンツコーズウェイがいるファミリーを背景に持つ。

父ウートンバセットは、フランスにおける2歳G1ジャンルクラグルデル賞(芝1400m)の勝ち馬。2012年にフランスで種牡馬入りしたが、その子出しの良さに目をつけたクールモアに購買され、2021年からアイルランドのクールモアスタッドに移籍。今年の3歳世代から、G1仏ダービー(芝2100m)勝ち馬カミュー

ピサロ、G1仏2000ギニー(芝1600m)勝ち馬アンリマティス、G1愛プリティーポリース(芝10F)勝ち馬ワール、G1英ダービー(芝12F6y)3着馬テネシースタッドらが登場し、ヨーロッパ全域を対象としたリーディングサイヤーランキングで首位に立っている(7月15日現在)。

2歳戦から活躍をした母の特性を受け継いだようで、アルバートアインシュタインも仕上がりが早く、今年5月10日にネースで行われたメイドン(芝6F)でデビュー。道中2番手から残り1Fで抜け出す危なげのないレースぶりで1.1/4馬身差の勝利を収め、緒戦勝ちを飾った。

陣営がアルバートアインシュタインの2戦目に選択したのが、2週間後の5月25日にカラで行われたG3マーブルヒルS(芝6F)だった。アイルランドの競馬カレンダーで、2歳牡馬が走れる重賞としては開催時期が最も早いこのレースで、同馬はオッズ1.36倍という圧倒的1番人気に推された。

レース前半は、やや掛かり気味に行きたがる馬を鞍上R・ムーアが抑えて、4番手を追走。鞍上のゴーサインが出たのが残り300mを切った辺りで、前にあった馬の壁をこじ開けるようにして先頭に立った同馬が、2着以下に3/4馬身差をつけ

て優勝。無敗の重賞制覇を果たした。

その後、アルバートアインシュタインは、ロイヤルアスコット初日に組まれたG2コヴェントリース(芝6F)を目標に調整されたが、球節に軽い不安を発症したため、ここは回避することになった。

そのG2コヴェントリースを3馬身差で快勝し、デビューから無敗の連勝で重賞初制覇を果たしたのが、アルバートアインシュタインと同厩のシュタード(牡2、父スタースバングルドバナー)だった。ロイヤルアスコットにおけるオブライエン厩舎は、同馬以外にも、チャールズダーウイン(牡2、父ノーネイネヴァー)がG2ノーフォークS(芝5F)を、トゥルーラヴ(牡2、父ノーネイネヴァー)がG2クイーンメアリーS(芝5F)を制覇と、例年以上に2歳世代の層が厚いところを見つけた。そんな中、当のエイダン・オブライエン調教師が、「今年のウチの厩舎で、2歳世代のナンバーワンはこの馬」と公言しているのが、アルバートアインシュタインなのである。

果たして距離の延長に対応できるのか。成長力はあるのか。現状では未知数な部分が多いことも事実だが、伯樂がその素質に太鼓判を押すアルバートアインシュタインの今後、大きな注目が集まっている。